

星あかり

泉鏡花

青空文庫

もとより何故なにゆえという理わけはないので、墓石の倒れたのを引摺ひきずり寄せて、二ツばかり重ねて台にした。

その上に乗つて、雨戸あまどの引合せひきあわせの上の方を、ガタガタ動かして見たが、開きそうにもない。雨戸うちの中は、相州西鎌倉みだればし乱橋みょうちようじの妙長寺ほつけという、法華宗となの寺の、本堂に隣つた八畳の、横に長い置床おきどこの附いた座敷で、向つて左手に、葛籠つづら、革鞆かばんなどを置いた際きわに、山科やましなという医学生が、四六しろうくの借蚊帳かりかやを釣つて寝て居るのである。

声を懸けて、戸とを敲たたいて、開けておくれと言え、何の造作ぞうさくはないのだけれども、止よせ、と留めるのを肯きかないで、墓原はかはらを夜中に徘徊はいかいするのは好いい心持こころもちのものだと、二ツ三ツ言争いいあらそつて出た、いまのさき、内うちで心張棒しんばりぼうを構えたのは、自分を閉出しめだしたのだと思うから、我慢たのにも恃たのむまい。……

冷つめたい石塔せきとうに手を載せたり、湿しめりくさ臭におい塔婆とうばを掴つかんだり、花筒はなづつの腐水くされみずに星の映るのを覗のぞいたり、漫歩そぞろあるきをして居たが、藪やぶが近く、蚊かが酷ひどいから、座敷の蚊帳が懐なつかしくなつて、内へ入ろうと思つたので、戸を開けようとすると閉出されたことに気がついた。

それから墓石に乗つて推おして見たが、原もとより然そうすれば開くであろうという望のぞみがあつた

のではなく、唯居るよりもと、徒らに試みたばかりなのであった。

何にもならないで、ぼたりと力なく墓石から下りて、腕を拱き、差俯向いて、じっとして立つて居ると、しつきりなしに蚊が集る。毒虫が苦しいから、もつと樹立の少い、広々とした、うるさくない処をと、寺の境内に気がついたから、歩き出して、卵塔場の開戸から出て、本堂の前に行つた。

然まで大きくもない寺で、和尚と婆さんと二人で住む。門まで僅か三四間、左手は祠の前を一坪ばかり花壇にして、松葉牡丹、鬼百合、夏菊など雑植の繁つた中に、向日葵の花は高く蓮の葉の如く押被さつて、何時の間にか星は隠れた。鼠色の空はどんよりとして、流るる雲も何にもない。なかなか気が晴々しないから、一層海端へ行つて見ようと思つて、さて、ぶらぶら。

門の左側に、井戸が一個。飲水ではないので、極めて塩ツ辛いが、底は浅い、屈んでぎぶぎぶ、さるぼうで汲み得らるる。石畳で穿下した合目には、このあたりに産する何とかいう蟹、甲良が黄色で、足の赤い、小さなのが数限なく群つて動いて居る。毎朝この水で顔を洗う、一杯頭から浴びようとしたけれども、あんな蟹は、夜中に何をするか分らぬと思つてやめた。

門を出ると、右左、二一畝ばかり慰みに植えた青田があつて、向う正面の畦中に、琴弾松というのがある。一昨日の晩宵の口に、その松のうらおもてに、ちらちら灯が見えたのを、海浜の別荘で花火を焚くのだといひ、否、狐火だともいつた。その時は濡れたような真黒な暗夜だったから、その灯で松の葉もすらすらと透通るように青く見えたが、今は、恰も曇つた一面の銀泥に描いた墨絵のようだと、熟と見ながら、敷石を踏んだが、カラリカラリと日和下駄の音の冴えるのが耳に入つて、フと立留つた。門外の道は、弓形に一条、ほのぼのと白く、比企ヶ谷の山から由井ヶ浜の磯際まで、斜に鵲の橋を渡したよう也。

ハヤ浪の音が聞えて来た。

浜の方へ五六間進むと、土橋が一架、並の小さなだけけれども、滑川に架つたのだの、長谷の行合橋だのと、おなじ名に聞えた乱橋というのである。

この上で又た立停つて前途を見ながら、由井ヶ浜までは、未だ三町ばかりあると、つくづく然う考へた。三町は蓋し遠い道ではないが、身体も精神も共に太く疲れて居たからで。

しかしそのまま素直に立つてるのが、余り辛かつたから又た歩いた。

路の両側しばらくのあいだ、人家が断えては続いたが、いずれも寝静まって、白けた藁屋の中に、何家も何家も人の氣勢がせぬ。

その寂寞を破る、登音が高いので、夜更に里人の懷疑を受けはしないかという懸念から、誰も咎めはせぬのに、拔足、差足、音は立てまいと思うほど、なお下駄の響が胸を打って、耳を貫く。

何か、自分は世の中の一切のものに、現在、慙く、悄然、夜露で重ツくるしい、白地の浴衣の、しおたれた、細い姿で、首を垂れて、唯一人、由井ヶ浜へ通ずる砂道を辿ることを、見られてはならぬ、知られてはならぬ、気取られてはならぬというような思であることを、まあ！ 廂も、屋根も、居酒屋の軒にかかった杉の葉も、百姓屋の土間に据えてある粉挽臼も、皆目を以て、じろじろ睨めるようで、身の置処ないまでに、右から、左から、路をせばめられて、しめつけられて、小さく、堅くなつて、おどおどして、その癖、駆け出そうとする勇氣はなく、凡そ人間の歩行に、ありツたけの遅さで、汗になりながら、人家のある処をすり抜けて、ようよう石地藏の立つ処。

ほツと息をすると、びようびようと、頻に犬の吠えるのが聞えた。

一つでない、二つでもない。三頭も四頭も一斉に吠え立てるのは、丁ど前途の浜際に、

また人家が七八軒、浴場、あらものや荒物屋など一廓ひとくるわになつて居るそのあたり。彼処あそこを通抜とおりにぬけねばならないと思うと、今度は寒氣さむけがした。我ながら、自分を怪むほどであるから、恐ろしく犬を憚はばつたものである。進まれもせず、引返せば再び石臼いしうすだの、松の葉だの、屋根にも廂ひさしにも睨にらまれる、あの、この上もない厭いやな思おもひをしなければならぬの歟かと、それもならず。静じつと立つてると、天窓あたまがふらふら、おしつけられるような、しめつけられるような、ひしひし犇はし々と重いものでおされるような、切せつない、堪たまらない氣がして、もはや！ 横に倒れようかと思つた。

処へ、荷車むしやうが一台、前方から押寄せるが如くに動いて、来たのは頬ほ被おかぶりをした百姓である。

これに夢が覺めたようになって、少し元氣がつく。

曳ひいて来たは空車からぐるまで、青菜あおなも、藁わらも乗つて居はしなかったが、何故なぜか、雪の下よどの朝市に行くのであらうと見て取つたので、なるほど、星の消えたのも、空が淀よどんで居るのも、夜明よあけに間まのない所せ為いであらう。墓原はかばらへ出たのは十二時過すぎ、それから、ああして、ああして、と此処ここまで来た間あいだのことを心に繰返して、大分だいぶんの時間が経たつたから。

と思う内に、車は自分の前、ものの二三間隔げんたる処から、左の山道やまみちの方へ曲つた。雪

の下へ行くには、来て、自分と摺れ違つて後方へ通り抜けねばならないのに、と怪みながら見ると、ぼやけた色で、夜の色よりも少し白く見えた、車も、人も、山道の半あたりでツイ目のさきにあるような、大きな、鮮な形で、ありのまま衝と消えた。

今は最う、さつきから荷車が唯亡つてあるいて、少しも輾輾の音の聞えなかったことも念頭に置かないで、早くこの懊悩を洗い流そうと、一直線に、夜明に間もないと考えたから、人憚らず足早に進んだ。荒物屋の軒下の薄暗い処に、斑犬が一頭、うしろ向に、長く伸びて寝て居たばかり、事なく着いたのは由井ヶ浜である。

碧水金砂、昼の趣とは違つて、霊山ヶ崎の突端と小坪の浜でおしまわした遠浅は、暗黒の色を帯び、伊豆の七島も見ゆるという蒼海原は、さき濁に濁つて、果なくおつかぶさつたように堆い水面は、おなじ色に空に連つて居る。浪打際は綿をば束ねたような白い波、波頭に泡を立てて、どうと寄せては、ざっと、おうように、重々しゅう、飜ると、ひたひたと押寄せるが如くに来る。これは、一秒に砂一粒、幾億万年の後には、この大陸を浸し尽そうとする処の水で、いまでも、瞬間の後も、咄嗟のさきも、正に然なすべく働いて居るのであるが、自分は余り大陸の一端が浪のために喰欠かれること疾いのを、心細く感ずるばかりであつた。

妙長寺に寄宿してから三十日ばかりになるが、先に来た時分とは浜が著しく縮まって居る。町を離れてから浪打際まで、凡そ二百歩もあつた筈なのが、白砂に足を踏掛けたと思うと、早や爪先が冷く浪のさきに触れたので、昼間は鉄の鍋で煮上げたような砂が、皆ずぶずぶに濡れて、冷こく、宛然網の下を、水が潜つて寄せ来るよう、砂地に立つても身体が揺ぎそうに思われて、不安心でならぬから、浪が襲うとすたすたと後へ退き、浪が返るとすたすたと前へ進んで、砂の上に唯一人やがて星一つない下に、果のない蒼海の浪に、あわれ果敢い、弱い、力のない、身体単個弄ばれて、刎返されて居るのだ、と心着いて悚然とした。

時に大浪が、一あて推寄せたのに足を打たれて、氣も上ずつて蹣跚けかつた。手が、砂地に引上げてある難破船の、纔かにその形を留めて居る、三十石積と見覚えのある、その舷にかかつて、五寸釘をヒヤヒヤと掴んで、また身震をした。下駄はさつきから砂地を駆ける内に、いつの間にか脱いでしまつて、跣足である。

何故かは知らぬが、この船にでも乗つて助かろうと、片手を舷に添えて、あわただしく擦上ろうとする、足が砂を離れて空にかかり、胸が前屈みになつて、がつくり俯向いた目に、船底に銀のような水が溜つて居るのを見た。

思わずあツといつて失望した時、轟々轟々という波の音。山を覆したように大畝が来たとばかりで、——跣足で一文字に引返したが、吐息もならず——寺の門を入ると、其処まで隙間もなく追縋った、灰汁を覆したような海は、自分の背から放れて去った。引き息で飛着いた、本堂の戸を、力まかせにがたひしと開ける、屋根の上で、ガラガラという響、瓦が残らず飛上って、舞立って、乱合って、打破れた音がしたので、はツと思うと、目が眩んで、耳が聞えなくなつた。が、うツかりした、疲れ果てた、倒れそうな自分の体は、……夢中で、色の褪せた、天井の低い、皺だらけな蚊帳の片隅を掴んで、暗くなつた灯の影に、透かして蚊帳の裡を覗いた。

医学生は肌脱で、うつむけに寝て、踏返した夜具の上へ、両足を投懸けて眠つて居る。

ト枕を並べ、仰向になり、胸の上に片手を力なく、片手を投出し、足をのぼして、口を結んだ顔は、灯の片影になつて、一人すやすやと寝て居るのを、……一目見ると、それは自分であつたので、天窓から氷を浴びたように筋がしまった。

ひたと冷い汗になつて、眼を睜き、殺されるのであろうと思ひながら、すかして蚊帳の外を見たが、墓原をさまよつて、乱橋から由井ヶ浜をうろついて死になつて帰つて

来た自分の姿は、立つて、蚊帳に縫^{すが}つては居なかつた。

もののけはいを、夜毎^{よごと}の心持^{こころもち}で考えると、まだ三時には間^まがあつたので、最^もう最^もうあたまがおもいから、そのまま黙つて、母上の御名^{おんな}を念じた。——人は慫^こういうことから気が違うのであろう。

青空文庫情報

底本：「書物の王国11 分身」国書刊行会

1999（平成11）年1月22日初版第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第四卷」岩波書店

1941（昭和16）年3月15日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2006年3月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星あかり

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>